



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.209
2013(平成25)年 2月20日(水)発行

辛夷
こぼし

心配されたことが起こっています・・・

「子ども3人に甲状腺がん・7人にも疑い」 子どもたちを被曝から守りたい！

■震災・原発事故から2年、心配していたことがとうとう起きています■<下の記事>のように、福島の18歳以下の子どもたちに甲状腺ガン3人が見つかり、さらに7人にも疑いがあり、発生率は250倍の増加■国、県、福島医大は「原発事故の被曝の影響とは考えにくい」と小さく評価しようとしています、各方面や海外からも、さらに綿密な診断や調査を求める声があがっています。

■これが、これから起こり得る事態の恐ろしい初期兆候でないことを祈るばかりです■福島県知事や国にも迅速な対応を求めたいものです。



▲『福島民報』に連載中の朝倉悠三さん(本会会員)の「絵日記」

都市防災論の早稻田大学伊藤滋教授の指摘です。震災直後の二〇一一年三月十五日、政府は「福島県民四十万人の避難」を打診しますが、県、あるいは福島市？はこれを拒否。また手違いとは言え、「SPEEDI」を公表しなかったのも、また「ヨウ素剤配布」を止めたのも県や県知事だったという事です。これが本当なら大変なことです。

福島の子3人 甲状腺がん

4万人調査「被曝影響考えにくい」

福島県は13日、東京電力一象は、飯館村や浪江町など福島第一原発事故の発生当時に18歳以下だった3人が甲状腺がんを診断され、7人に疑いがあると発表された。チェルノブイリ事故では、被曝から最低4〜5年後に甲状腺がんが発生しており、県は「総合的に判断して被曝の影響は考えにくい」と説明している。▼科学面へ被曝、解明の途上

県は事故当時、18歳以下だった約18万人のうち、約3万8千人の甲状腺の超音波検査結果をまとめた。計10人の平均年齢は15歳、男性は3人で女性が7人。腫瘍の直径は平均15mm。確定診断された3人は全員、進行がゆっくりとしたタイプの早期だった。今回の調査対

象は、飯館村や浪江町など避難区域などの子どもたちだ。3人は手術でがんを摘出、通常の日常生活を送っているという。

甲状腺がんの大半は進行が遅く、生存率も高い。これまで、子どもの甲状腺がんの発生頻度は100万人に1〜2人程度とみられていた。今回、それより高い頻度で見つかった。福島県立医大の鈴木真一教授は「今回のような精度の高い超音波検査で大勢の子どもを対象にした調査は前例がなく、比較はできない」と説明した。成人の超音波検査では3・5%に甲状腺がんが見つかったとの報告もあるという。

※放射能の影響は、ニコニコ笑っている人には来ません。(2011.3.21 山下俊一教授)カ...

▲2月14日『朝日新聞』

●「放射能は怖い」という私たちの常識に対し、「低線量の放射能はむしろ健康に良い」というアメリカ発信の「ホルミシス理論」が今、日本の国会議員や評論家に蔓延し、原発再稼働の誘因に。そうでしたら、どうぞお子様やお孫さんをつれて南相馬市に住んでください。政治家は南相馬市に近づこうともしないくせに！

小出裕章先生講演会「低線量放射能被曝を考える」(仮題)

●日時:2013年6月22日(土)開場:13時 講演:13時30分より

●会場:南相馬市市民会館(ゆめはっと)

詳細は後日チラシで!



